

# 保育の体験と思索

## ——子どもの世界の探究——(二十四)

津 守 真

ゆっくりと静かに動いていた雨の日の一日

をしていた。私は、午前中の前半の時間は、ほとんど手があいて、見物しているような形で過した。後半は、廊下で箱積木の電車に乗って過した。

五月一日

朝、私は室内の椅子に坐っている。

机の一つで、鯉のぼりのうろこ貼りが断続的につづいている。

うろこの紙を貼ってゆく作業で、子どもは入れ替りながら、何人かの子どもがやっている。あとの子どもたちは、それぞれが自分のしたいことをして動いていた。担任の先生は、部屋の隅の製作材料をおいてある机で、ほとんどの時間を、セロテープ切りなど

この日は、私には、子どもの中に身をおき、いつでも子どもの要求に応じられる態勢だったが、ほとんど観察者の役をとることができた。担任の先生のまわりにも、あまり子どもはいないで、子どもたちはそれぞれ動いていた。雨の日など、子どもたちがぶつかり合っても大変な日もあるけれども、この日のように、落ちていてゆっくりと静かに動く一日もしばしばある。愛育の知恵おくれの子どものグループでも同様の経験をしたことがあるし、家庭の保育でも経験したことが何度もある。こういうときは、おと

などのかかわりを求めないでも、子どもたちは、それぞれが自分の生活の中で追求するものがあって、満ち足りているのであると思う。

この日は、五歳児の一学期の最初のころの一日であって、この日の動きを見てみると、これまでにつみ重ねられてきた、幼稚園での生活から生れた一日であることを思う。私と子どもとの接点から見れば、ゆっくりとした動きであるが、ひとりひとりの子どもの生活に視点をおいてみると、激しく速く動いている。しかし、それぞれが、自分の目標をもって、楽しんで動いているときには、保育者や観察者にとっては、ゆっくりとした有機的な動きととらえられるのであろう。次に、私が観察した範囲での子どもの動きを、もう少し具体的に調べてみる。

私が室内で椅子に坐っていると、部屋の一隅にいたMくんが、室内を横切って私にボールを投げる。私はボールを受けとるが、一瞬、目が合い、にこっと笑う。この日は私とMくんとのつきあいはこれだけであった。Mくんは私にボールを投げてきたが、Mくんには自分の生活があったので、これ以上、私が相手をする必要はなかったのである。このあと、何回か、Mくんの活動に目がとまった場面があった。女児mが、他の女児二人と椅子に坐って

いるところにMくんがきた。そして、mと話を交しながら、その隣の椅子にじっと坐っている。mはクラスの中でも、一人になりがちな子どもで、強いMとは対照的な女児である。その女の子とMくんが話をしている場面を見ることは、私にとっては、きわめて珍らしいことであった。それからしばらくたって気がつく。Mくんは女児二人と画用紙に野菜をかいて切り抜いている。いままですき合ったことのなかった女の子とことばを交し遊ぶことができるほどに、Mの世界に自分と異質なものを包容するゆとりができたと考えられよう。

男児Iはピストルと言って、自分が作った銃をもってくる。今日は何人もの男児が銃を作っている。Iも私にピストルを見せにきたあとも他の子どもたちと銃をつくりつづける。Iは昨年入園して以来、私としばしばつき合いがあるので、作っている途中で私に見せにきたのである。

男児Kが画用紙を帯状に切り、輪を作って、手錠だと言って持ってくる。私の手にはめる。いつもは荒々しくとびかかってくるような感じのKであるが、何かおっとりとしている。ひとりでいくつも手錠を作り、自分の手にはめてためているが見える。

男児Yは画用紙を切り、四角の筒を作り、色をつけて電車を作っている。画用紙を菱形に切ってパンタグラフを作ろうと苦勞し

ているが、私のところに持ってきて、やってくれと頼む。Yは他人から断られると、じきにあきらめてしまうことが多いことに気付いていたので、私はすぐに手伝って作ってやる。そのあと、Yはひとりで電車を完成させようと、うつむいて電車をいじりつづけている。

いつのまにか、たくさんの子どもたちが遊戯室にゆき、室内には、電車や銃を作っている子どもたちが六人くらい、積木をしている子どもも数人、ままごとをしている子どもが数人になる。

女児Wが私のところにきて、私によりかかり、いろいろと話しかける。「お兄ちゃん何年生か?」「そうだな、二年生だろう」「ちがうもん、お兄ちゃんは小学校の三年生だけど、大きいから六年生にまちがえられるの」……「おじさん、何してんの?」「Wちゃんみてるの」「話してるじゃない?」「そうか、話してるんだ」ハ……、と話が冗談ぼくつづく。女の子が二人ほど加わり、女の子めいた話になるが、じきに私のところから去り、どこかにいってしまふ。こうして子どもがしばらく私のところにいるも、自分たちの遊びの方が面白くて、私は後に残される。それだから、また私は観察者になることができる。

男児Kは、ひとりで戸口の傍でかなり長い間じっとしているのが目につく。ひとりでつまらないのかと思って見ていた。大分長

い間の後、指人形とつみきをいじりはじめ、そこに男児Tがきてしゃべり始めたと思ったら、二人で廊下の方に出ていった。長い間一人で戸口に立っていたのは、一人でいたかどうかだろうと思う。

女児mはひとりで絵本をみている。何の絵本かと思って注意して見ると、白雪姫である。この子どもは、突然白雪姫のおばあさんやお姫さまのせりふを言っていて私に近づいてきて驚ろかされたことが今までに何度かあった。こうしてひとりで白雪姫の絵本をじっと見つめているのを見ると、今も白雪姫の世界の中にいるのかと察せられてはほえましくなる。突然mは私のところに近より、「来て」と私の手を引く。私はmと一緒に廊下に出ると、「遊ぼう」と言っってなわとびのなわを持ってくる。なわとびをとぼうとするが、なかなかうまくいかない。まもなく、他の女の子と廊下で、ラケットでボールころがしをはじめ。

さっきまで銃や手銃を作っていた男児、I、K、Taらが廊下に椅子を並べて電車にしている。画用紙に線をひき、表にして、「新たながわせん」「山手せん」「きんてつロマンスカー」など書くことに余念がない。私は箱積木や椅子で作った電車の中に腰をおろすが、みんなそれぞれのこと忙がしくしていて、私は何もやることがない。

Dが遊戯室の方から息を切って走ってきて、何か言って去る。

額に汗を一ばいかいて、エネルギー感である。三歳、四歳ときのDは、動きも鈍く、友だちとのつき合いもうまくいかなかったので、こうして汗をかいて走ってきては走り去ってゆくDを、私は不思議な思いで見ると、ここにも激しく動いている子どもの世界がある。

廊下の電車の中で、女兒eが私の傍に坐っている。さっき室内で、「どうにもならないの」と言っていたことを思い出し、私は小さな箱つみきを、「お弁当」「コーヒー」など言って差し出したが、だまっていて受けとらない。それでいながらずっと私の傍に坐っていた。この女の子とは、私は今まで殆どつき合ったことがない。何か心に屈託がありそうで、続けてゆっくりつき合いたい気持ちが残った。この一日の中で、おとなとのつき合いを求めている唯一の子どもであったと思う。残念なことに、じきにお弁当の時間になってしまった。

ここに見たように、それぞれの子どもに目をとめると、どの子どもも、それぞれが追求して動いている生活があつて、それがおとなとの接点では、ゆっくりと動いて調和のとれた一日と感じられたのである。もしも、ひとりひとりの行動をもっと詳細に検討してみるならば、その追求しているものは、外から与えられた

課題ではなく、それぞれの内心から促されたものであるのを見ることは容易であろう。こうして、ひとつの集団の中で、それぞれの人が自分の心の奥深くから出た望みに従って楽しみ、相互に調和がとれているとき、それが民主的な社会と言えるのではないだろうか。内心から促されたものを追求している生活、それに伴う満足感と希望とがなくて、意見だけを言わせてみても、実質的な民主的社会とはならないだろう。この一日のように、子ども自身が満足し、他の子どもも満足して共に生活して全体がゆっくりと動いてゆく体験をするとき、民主的な社会生活の原型を把握する一つの基礎がつけられているのではないだろうか。

五歳児の年長組になって、四歳児よりも一段と高度な保育があるのではないかという予想が私の心の中のどこかにあつたことを、私自身否定することはできない。しかし、この日のゆっくりと静かに動いていた一日にふれて、これは立派な五歳児の一日であると思つた。とくに目立つたことや、まとまつた活動があつたわけではない。それぞれが自分のことをして、ゆっくりと動いていただけである。このことは、この後の五歳児の生活についても同様である。それぞれの子どもが心から満足して動く生活が重要なのであつて、それをぬきにして高等な活動計画を考えようとし

たら、ゆきすぎになるであろう。そして、五歳児は幼稚園としては最年長なので、急に高度な計画を望む心理がおとなの側にはたらくのではないだろうか。

十数年前に、この同じH先生のクラスで、私は五歳児の保育の継続的な観察記録をとり、それを「五歳児の保育」と題して、本誌の誌上に連載したことがあった。そのときの記録に、同じ五月一日の記録がある。十数年を距てた記録を比較するのに、五月一日にこだわる理由はないのであるが、担任の先生も観察者も、部屋も同じであるので、少しばかり比較してみたい。そのときには、私は客観的観察的記録者であり、今日は保育に参加しながらの観察者であるという相違がある。しかし、この日に限って言えば、私は観察者として全体を見ることのできる状態にあり、条件としてそれほど大きく違ってはいないと思う。この十数年間に、H先生の保育が少しく変化してきており、この点において、比較を試みることは興味深い。

### 昭和三十九年「五歳児の記録」における5月1日

(幼児の教育64巻6号)

鯉のぼりをつくりはじめる。

子どもの日までに鯉のぼりをつくる予定がある。目標としてひとりが二尾の鯉をつくってほしい。

この点が、担任の先生の考えとして、前回と今回とで相違する大きな点である。今回も似たような鯉のぼり作りをしているが、前回のように全員が二尾の鯉をつくるようにという考えはないようである。もちろん、前回も、その目標は一週間か十日の間に全員が作ればよいので、十分にゆとりはある。しかし、担任の先生の側に、このような目標があると、それに従って子どもの動き方は違ってくる。

朝、ちぎり紙をはった鯉のつくりかけが机の上においてある。その机のまわりに四、五人の子どもたちが集まってきて鯉をつくりはじめる。先生は紙を持って子どもたちのもとに行く。先生は紙を半分においてまわりにいる一人ひとりの子どもに、ここに鯉をかくて二枚いっしょに切るようにはなしている。ちぎり紙をつくってもよいし、クレヨンでかいてもいいし、などとはなしにつける。紙の大きさは子どもたちがこのくらいのをつくるといつてくるのに応じて先生が準備する。先生もつくりかけのちぎり紙の鯉のつづきをつくりはじめる。子どもたちが入れかわりにつく

ついで、結局半数くらいの子どもが鯉をつくった。十cmくらいの小さい鯉から1mくらい大きい鯉などいろいろな鯉ができる。

この記録を今回の記録の最初の部分と比較してみると面白い。

先生は鯉を作っており、何人かの子どもと一緒に鯉を作っているところは同じである。作るときの先生と子どもとの会話の内容もよく似ている。しかし、前回の5月1日の記録では、先生は子どもをつかまえて鯉を作らせようという積極的な意気込みが見えていて、子どもの側に、銃や手銃や電車を作ろうという発想の出でくる余地はない。次に前回の記録の中から、Eという男児の行動をぬき出して追ってみよう。

E 「先生、こんなに大きくなっちゃった。」

先生「いいわね。Eちゃんそれぐらいが、はるのをやってもぬるのをやってもいいわよ。」

E 「お母さんにははるのをやって、お父さんはぬるのにしようかな。」

先生「それもいいわね。ずいぶん長い鯉で、はでにおよぐでしようね。」……

Eが黒い紙をちぎり紙にしてうろこにしているのを見て、

先生「こういうこいのぼりもいいわね。だんだんうろこがかさなるんですって。」と皆にみせる。……

EとTはさっきから二人でしきりにはなしをしながら作っている。

E 「ぼくの方が大きいね。」

T 「ちょっとだけね。」

E 「二つ一緒につけると、お父さんとお母さんみたいだね。」

Eは顔をあかくして一枚一枚うろこをはっていたが、とうとう途中で先生のとこりに持っていく。

先生「あら、すてきになりましたね。せっかくこんなにきれいできているから、あした、つづきをしましうね。」と棚の上においておく。

Eはとぶようにして庭にでていく。

砂場で

男児たちはしゃべるで砂山をつくり、頂上にくぼみをつけて、

水を流す。

E 「ずいぶんおもしろいね。」

M 「あー、つづいた、つづいた」じょうろに水をくんできて、水を流す。

R 「わーつながった。つながった。」

次の瞬間砂山をくずし、丸太で砂地をたいらになでつける。

E 「こちらは工事中だから水をいれないで。」

E 「セメント下さい」とRのバケツをうけとり、砂地の上にとどろの砂をなでつける。

E 「これ、おべんとう終ったら、すごいだろうな。セメントが固まって。」このようにして砂遊びはおべんとうになるまでつづく。

この記録にみるように、Eは鯉のぼり作りの終りのころは、鯉のぼりを作るよりも、他のことをして遊びたくなっていた。戸外での子どもたちの面白そうな遊びに魅かれていたのかもしれないし、あるいは自分らしい活動にもどりがたくなっていったのかもしれない。先生はEのその気持を察して、「あしたつづきをしましゅうね」と言いつつ、Eが鯉のぼりからはなれることを承認する。するとEはとぶようにして庭に出てゆき、砂場で遊びはじめた。すしもこの日に、Eが砂遊びをすることが許されなかったら、この日の幼稚園の生活はEにとって不満足なものに終わったであろう。また、もしもこの朝、鯉のぼり作りをしないでE自身の作りたいものを作ったとしたら、それでもよかったであろう。

私はこのように記して、十数年前の記録にある鯉のぼりの保育を否定しようとするつもりはない。このときの「五歳児の記録」にあるように、このときの一年間余の保育の観察記録は、誘導保

育の一つの典型を見せてくれるものであって、何週間もかけて「おもちゃや」や「動物園」などができてゆく過程を見直すとき、今でも私自身の内心が躍る。この記録や、その他の誘導保育の記録を見ると分ることであるが、そこでは、先生自身がこうした大きな製作を作り上げてゆくことに情熱をもっており、先生の傍にゆくと、子どもたちも何かそれをやりたくなるような熱気と喜びを感じたのではないかと思う。そういう時期の先生にゆきあった子どもたちは、先生から得るものも大きいであろう。この点でも、保育はおとなと子どもとの人間的なかわりが原動力となつて動くのであると思う。

その同じ先生が、同じ五月一日に鯉のぼり製作をしながら、異なった一日を作りあげていることに実に意味深いものを感じる。今年のこの日の一日に、どの子どもも満ち足りて得るものがあつたであろうことを私は疑わない。ここには私が簡単にことばで尽くすことのできない先生自身の成長があるのだと思う。

子どもと長い間つき合っていると、次第に、自分とは異なった人間のそれぞれの仕方成長してゆくのであることを悟るようになる。見るところがかわれば、保育もまたかわってくる。子どもとかかわりながら、おとなも成長してゆくところに保育の営みがあるのであると思う。

(つづく)